

茫々はるか

(大正十三年寮歌)

高野芳雄君 作歌
神島辰雄君 作曲

一

茫々はるかに緑に炎えて
石狩原頭美の香に酔えば
高鳴りあふるる若人の血や
ああこの霊の憧れの地に
曙光に輝く黎明告ぐる
鐘を撞かばや

二

真紅に熱せる入陽は沈み
黙思の歩みを運ぶ夕宵は
エルムの繁みの梢透かして
夕映流るる黄色の彩に
生命の窓をば疾く開け放ち
霊気吸はずや

三

地平の際涯によしや吾等の
感激は沈めど彼方はるかに
思索の曠野は尽せぬなれば
石狩河岸に友よ佇み
野生の律べの秘奥を求め
真理を聴かん

四

寒風荒びて吹雪吹く夜も
榆林に洩れたる四寮の燭光
生命ぞまたたき青春の日の
灯累りて永遠に輝く
ああ其の灯かげに霊と血潮の
籠められしかな

五

昔を偲べば吾等が寮は
原始の茂森に生める自然児
不断の船路に彼岸めがけて
自治への歩みは十九星霜
自由の栄に友よ奏でん
平和の序曲